

好奇心に満ちた元祖フィードワーカーの足跡を知る

# 知識を糧に旅に生きた菅江真澄

江戸時代、日本各地を歩いた人物といえば、松尾芭蕉と伊能忠敬が有名。だが、もう一人、北日本を巡り歩き、自然や習俗の詳細な記録を残した旅人がいる。菅江真澄（七五四〜一八二九）——三十歳で故郷を出て、亡くなるまでの四十六年間を旅に過した。この偉大な旅行家について石井正己さんに話を聞いた。

東京学芸大学教授

## 石井正己

●いしい・まさみ 1958年東京都生まれ。一橋大学大学院連携教授、柳田國男・松岡家記念館顧問。専門は日本文学、民俗学。『旅する菅江真澄』（三弥井書店）『感染症文学論序説』（河出書房新社）など著書、編著多数。

### 参勤交代から弥次・喜多まで

——菅江真澄が旅をしたのは江戸時代の後期です。当時、一般の人が自由に行き来できたのでしょうか？

戦国時代を経て、慶長八（一六〇三年）から約二五〇年続いた江戸時代は、徳川幕府の下、比較的平和で安定した時代でした。

ある意味では管理社会で、各地に

関所を置いて人や物の動きを制限していました。特に箱根の関所は、「入鉄砲に出女」といわれたように、江戸に鉄砲が入らないように、そして、江戸に住ませた諸大名の女性たちが逃げださないように規制したんですね。

大名には、一年おきくらいに自国の領地を離れて江戸に住む「参勤交

参勤交代による大名の往復は、地方文化の発展にも大きな役割を果たします。江戸と各地が直結し、江戸の文化が地方にそのまま広がるシステムができあがったのです。政治的な動きが人の移動や経済を活性化させたといえるでしょう。

江戸時代の旅といえば、熱狂的に盛んになったのが「お伊勢参り」です。西からも東からも、年間で百万人ほどが伊勢を目指したといわれています。

松尾芭蕉の有名な句「一家に遊女も寝たり萩と月」は、二十一年一度の式年遷宮の年に新潟から伊勢参りに行く、おそらく抜け参りの遊女と出会って詠んだとされています。虚構だという説もありますが、芭蕉の時代には女性が二人で旅をしたことがわかります。六十年に一度の周期で起こった「御蔭参り」にはご利

益が増すとされ、四百万人くらいがお伊勢参りに出かけたといえますから、驚きますね。

お伊勢参りというのは当時の人にとって本音でも建前でもあって、お参りに併せて物見遊山をしたのでしよう。多くの人が「一生に一度の伊勢参り」という名目で、旅を楽しみました。

ちょうど菅江真澄が生きた時代に出了たのが、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』です。弥次さんと喜多さんは、お伊勢参りにとどまらず京都や大阪を訪れ、さらに続編では讃岐（香川県）の金毘羅様から安芸（広島県）の宮島まで足を延ばしています。帰りは中山道に入って信濃（長野県）の善光寺にお参りし、草津温泉につかって江戸に帰ってくるといって、もう一度お伊勢参りをするという壮大な旅をしています。もちろんこれは創作ですが、二百年前の日

本人の観光熱が大変なものだったことがわかります。

### 真澄に光を当てた柳田國男

——当時すでに「旅のモデルを示した作品」ができて、「旅ブーム」が起きていたんですね。菅江真澄ほどのような旅をしたのでしょうか。

菅江真澄は宝暦四（一七五四年）に三河（愛知県）で生まれました。現在の豊橋市という説と岡崎市という説がありますが、今は岡崎説がやや有力でしょうか。

三十歳のときに旅に出て信濃に一年ほど滞在し、それから北へ向かって今の秋田県から青森県を訪れます。北海道に渡るうとして青森市にある善知鳥神社で占いをしたところ、「三年待て」と出たので渡海を留まりました。ちょうど天明の飢饉のこ